

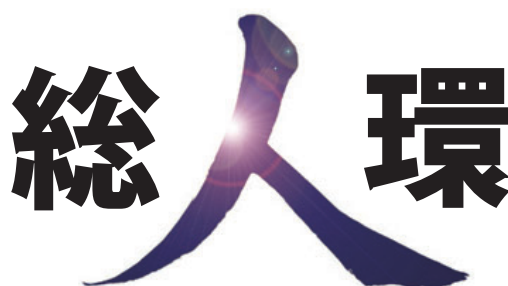


京都大学
KYOTO UNIVERSITY

総合人間学部／人間・環境学研究科
Faculty of Integrated Human Studies / Human and Environmental Studies

No.

63



2019.10

総人・人環 広報

新任の先生方より

着任にあたって.....	石岡 学.....	3
よその感覚からはじまるもの.....	中筋 朋.....	4
化学を楽しむ.....	中村 敏浩.....	5
実験室に地球をつくる.....	野村 龍一.....	6
総人に辿りつくまで.....	丸山 善宏.....	7

平成 30 年度総合人間学部卒業論文・卒業研究題目一覧.....	8
----------------------------------	---

ご退任を迎えられた先生から

人・環での四半世紀.....	田中 雅一.....	13
----------------	------------	----

新任の先生方より

着任にあたって



私は総合人間学部の5期生で、卒業後は人間・環境学研究科で修士号・博士号を取得した。そういう意味ではいかにも「生え抜き」と見える立場ではあるが、曲がりなりにも研究者となりこうして

教員として古巣に戻ってくることは、正直いうとあまり想像していなかった。今でも、このような「着任の挨拶」を書いていることが不思議でしやうがない。

というのは、京都大学の志望理由も、大学院への進学動機も、およそ不純なものだったからである。そもそも、あまり私は「学校」というものが好きではなかった。「教育現象を研究している」というと、学校や教育が好き人間だと思われるかもしれないが、少なくとも私はそうでない。特に中学・高校時代は何かと鬱屈した生活を送っていたため、京大を志望したのはその抑圧から逃れようと「自由の学風」に惹き寄せられたからである。しかし、そこで履き違えた「自由」を謳歌しすぎたせいで、卒業後の進路を考えなければならない時期になり、はたと立ち止まってしまう。このまま流されて「普通に就職する」という選択肢だけはなかったのだが（それは個人的には「学校」の延長線上にあるものと感じていた）、かといって全く模範的な学生ではなかった当時の私は、自分の問題関心を研究の形で昇華する術を持ち合わせていなかった。同級生が次々と就職先を決めていき、迷える私に勝ち誇った表情で憐憫の目を向けるに至っては、もはや出家でもしようかという気分になったものだ。そこで改めて思ったのは、物心ついた時分から10数年も「学校」に通ってきたことの意味である。早い話が、「これまでの人生はいっ

石岡 学

(総合人間学部 人間科学系)

人間・環境学研究科 共生人間学専攻)

たい何だったのか」という若者らしい悩みであり、そこから漠然と「学校」を歴史的に問い直してみたいと思うようになった。

このような人間であるから、結局は研究テーマも自分自身の経験に由来している。それは端的に言えば、「学校で教育を受ける」という経験がどのようなライフコース上の意味を持っているのか、という関心である。この関心は、一つには子どもや若者といったカテゴリーが「未熟な存在」として社会的にどのように意味づけられてきたのか、その歴史の変遷を探るといったテーマにつながっている。もう一つは、学校がもつ「育成」と「選抜」という機能の緊張関係についてである。これは「学歴偏重」「受験戦争」などが強く批判されていたように、日本社会においては試験、特に入試の局面において問題化され、90年代以降は就活の局面にも拡大している。この緊張関係をもたらず、日本社会における「能力観」のありようを解明することが、私の研究のもう一つの柱である。

教育の歴史研究は、かつては制度・政策や思想に関するテーマが多かったのだが、ここ20～30年の間に家族史や経済史といった周辺領域との接合や、ジェンダーや社会階層などの社会学的視点、あるいはメディア研究の成果の摂取など、随分と多様化してきた。私自身も当然ながらその影響を受けてきており、「学校で教育を受ける」経験の意味を個人的視点、社会的視点から広くとらえていきたいと考えている。私の知っている限りではあるが、総合人間学部出身の研究者には「専門バカ」に陥ることをどこかで拒否したくなる感覚があって、それはやはりこの学部の気風なのではないかと感じる。研究・教育活動を通じて、これからもそういった部分を刺激し合えるような機会があれば面白いだろうと思っている。

(いしおか まなぶ)

新任の先生方より

よその感覚からはじまるもの

中筋 朋

(総合人間学部人間文化環境学系/
人間・環境学研究科 共生文明学専攻)



こんにちは。2019年4月に愛媛大学法文学部から着任しました。京都には、家族で暮らしたことはないのですが、引越好きの両親とともに子供時代はあちこち移動して長く生活した土地がなく、

大学入学とともに一人暮らしをはじめた京都がもっとも長く暮らした町です。こうして戻ってきて、「地元」のなかったわたしですが、ようやく京都が地元になるのかなと思っています。もともと京大付近は、母の実家が日仏会館（という呼び名も変わってしまいましたが）の裏手にあり、生まれが北白川であることもあって馴染みぶかく、大学入学とともに京都に暮らしはじめたときも、不思議なタイムスリップのような感覚がありました。それにしても、祖父に手を引かれて吉田神社に散歩に行く途中で、「あれなあに？」とたずねて「大学だよ」と教えてもらった大学とこれほど長いご縁になるとは思ってもみませんでした。

「地元がない」のは、ある意味では研究においても同じかもしれません。専門は19世紀のフランス演劇ですが、日本でフランス文学専攻の学士を終えるとフランスで演劇学専攻の学士をとり、修士でも同じように、日本で仏文、フランスで演劇学……という「ジグザグ」ルートだったために、今でもどこか「よその」感がとれません。これは、修士のころから博士の途中までは現代演劇の研究をしていて、その後19世紀の研究をするようになったためもあるでしょうが、思えば卒業論文で、仏文にしながら当時としては珍しくサミュエル・ベケットを対象に選んでいたことからしても、根っからの「よその感」好きだけかもしれません。学生時代演劇に関わっていたときも、コン

テンポラリーダンスのワークショップによく顔を出していたので、ダンスの人には演劇の人、演劇の人にはダンスの人と認識されていたように思います。

しかし、研究をおこなううえではこの適度のよその感、あるいは「異物感」というのは大事なもののひとつのようにも思います。サミュエル・ベケットからはじまって、ヴァレール・ノヴァリナ、自然主義演劇、象徴主義演劇へと研究対象を移してきたのも、ひとつの興味の糸を辿ってではあるのですが、この異物感を求めてのことだったように思います。そもそも「よそ者がやってくる」というのは、物語の古典的な始まり方のひとつでもあるわけで、そこから動きが生まれてきやすいひとつの「型」であるという意味では、これは案外合理的な選択であったのかもしれませんが。

そういう意味でも、「よその感こそがホーム感」という雰囲気のある総人・人環に赴任してこられたことをとてもうれしく思っています。しかもちょうど最近になって、19世紀末フランスの演劇雑誌や上演時のパンフレットのなかに「よその」としてあった科学書についての言及や評論への興味から端を発して、19世紀の科学的言説が芸術といかに手を結びつつ、そしてある時点ではいかにうまく手を離してきたかについて、共同研究で取り組んでいます。そのなかで、わたしは19世紀末の「脳の劇」と言われる劇を扱うとともに、サイエンスライター系の系譜について調べ始めているところです。よそのものであることを享受する研究の場となるためには、自分自身、つねにこのよそのものの運動性を抱えていなければと思います。それにぴったりの環境で研究と教育に携われることに喜びを感じております。どうかよろしくお願いいたします。

(なかすじ とも)

新任の先生方より

化学を楽しむ



2019年4月1日付けで国際高等教育院化学教室に教授として着任し、翌月5月の平成から令和への改元と時を同じくして大学院人間・環境学研究科 相関環境学専攻(物質相関論講座・物質機能相

関論分野)の協力教員を務めています。私は、京都大学理学部を卒業、さらに、京都大学大学院理学研究科化学専攻の博士課程を修了した後、京都大学大学院工学研究科電子物性工学専攻(現 電子工学専攻)の教員として研究・教育の任に当たってきました。2013年に他大学に転出しましたが、このたび、6年ぶりに京都大学に戻ってきました。ただ、京都大学に戻ってきたとはいえ、理学研究科在学中は吉田キャンパス北部構内の研究室で、工学研究科在職中は吉田キャンパス本部構内、さらに、桂キャンパスの研究室で研究・教育活動を展開していましたので、今回、これまでとは異なる吉田南構内に新たに研究室を構えることとなり、日々新鮮な気持ちで教育・研究活動を楽しんでいます。

現在、「基礎物理化学要論」、「化学概論Ⅰ」、「化学概論Ⅱ」、「基礎化学実験」といった化学の全学共通教育科目を担当しています。工学部1回生向けの物理化学の講義「基礎物理化学要論」を行っている、私が理学部1回生のときに山内淳先生から物理化学の講義「化学1B」を受けていた頃のことを思い出し、何とも不思議な気持ちで講義をしています。また、吉田南構内の講義室(共南11教室)で「化学概論Ⅰ」の講義を行っている、私も1回生のときに同じ講義室で講義を受けてい

中村 敏浩

(人間・環境学研究科 相関環境学専攻/
国際高等教育院)

た頃のことを鮮明によみがえってきて、またまた不思議な気持ちで講義をしています。

さて、研究活動についてですが、これまでに、理学研究科化学専攻在学中は、物理化学(特に、分子の電子状態の解析、分子分光学)に関する研究に取り組んできました。その後、工学研究科電子物性工学専攻に教員として研究の場を移したのを機に、プラズマ工学、電子材料工学に関する研究活動を展開してきました。これからも、化学(物理化学、材料化学)と電子工学(半導体工学、プラズマ工学)を融合した研究を進めていきたいと考えています。具体的には、半導体等の電子材料薄膜について、(1)作製プロセスの開発と反応解析を皮切りに、(2)自ら作製した材料の物性評価、さらに(3)材料のデバイス応用まで、化学と物理学を基盤として手がけています。さらに、化学と電子工学の融合を進め、プラズマ化学を基軸に、新たなプラズマ反応を用いた材料合成・物質変換の開拓も進めています。最近、新たな二酸化炭素の固定化の手法として、密閉型気液界面プラズマによる物質変換が有効であることを示しました。気液界面プラズマ反応のメカニズムを解明し、有用物質への変換効率の向上を進めるとともに、得られた生成物質を「殺菌・消毒などの医療応用」や「農作物の成長促進など農業への応用」に用いるなど、さまざまな分野との新しいつながりを楽しんでいきたいと考えています。

人間・環境学研究科の皆さんとともに、電子工学にとどまらず医療や農業など幅広い分野に貢献できる化学の研究・教育活動を楽しんでいきたいと考えていますので、どうぞよろしくお願ひします。

(なかむら としひろ)

新任の先生方より

実験室に地球をつくる



2019年1月1日付で白眉センターに特定准教授として着任しました。白眉センター／プロジェクトは若手研究者に対し、学内業務を最小限に研究に専念させるためのプロ

ジェクトです。採用された研究者は受け入れ先となる所属を選び、自由な環境で研究に専念できます。私は人間・環境学研究科の小木曾哲教授の実験室を間借りし研究を行っています。

私の興味は地球がいかにして誕生したのか？どのようにして現在の姿になったのか？です。これらのことを知るためには、我々が住む地球表層環境の理解だけではならず、地下深く、地球深部の理解が必要不可欠になります。しかしながら地球半径6400 kmのうち、人類が到達した（掘ることができた）深さはたった12 kmでしかありません。そこで地球科学者は、ダイヤモンドアンビル装置を用いることで、地球深部に対応する高圧力・高温度の極限環境を実験室に再現し、地球を構成する物質の様々な物理的・化学的性質を理解するための研究に日夜取り組んでいます。このような高圧地球科学の進歩はめざましく、2010年には日本のグループによって地球中心の圧力温度である364万気圧、5000℃が実験室に再現されるまでに至っています。基礎技術が整った今、我々は地球の誕生と進化の理解に迫る大きなチャンスを前にしているといえます。高圧力高温度の試料からいかに有益な情報を引き出せるか、我々は、従来に

野村 龍一

(人間・環境学研究科 学際教育研究部／
白眉センター)

ない測定のアイディアや技術を導入することで、地球の形成と進化の理解に新しい知見をもたらすため研究を行っています。

1つだけ、我々が今取り組んでいるプロジェクトを紹介します。地球の内部は外核などの一部を除いて固体ですが、それらは人間にとってはとても長い時間スケールで「流れて」います。例えばケイ酸塩でできたマントル（深さ約35～2900kmまでの領域）は1～10億年のタイムスケールで対流していると考えられています。このような地球内部の流れの速さや向きを知ることは、45億年を通じた地球冷却の歴史や物質循環の歴史を知るために重要な課題です。そこで我々のグループでは、地球深部に対応する超高圧力・高温度の試料を「流し（変形させ）」、粘性などの動的性質を測るため回転式ダイヤモンドアンビルセルと呼ばれる装置と測定技術を開発しています。もちろんこのような開発技術は地球科学にとどまらず様々な応用も可能で、地球科学の枠を超えて多方面にわたる研究にも取り組んでいます。

また、私は2019年度前期よりILASセミナー「いかにして実験室で地球をつくるか」を開講しています。京都大学に入ったばかりの（が故に？）やる気のある学生の皆さんに刺激を受けています。また最近では理学部 地球惑星科学系から卒論生がグループに加わりました。斜め上からの発想が得意！という学生を大歓迎しています。ぜひ一緒に研究に取り組んでみませんか？

(のむら りゅういち)

新任の先生方より

総人に辿りつくまで

丸山 善宏

(人間・環境学研究科 学際研究教育部/
白眉センター)



私が京都大学総合人間学部を卒業したのは2008年でもう10年以上前のことになる。その後は文学研究科修士課程に進んだ後、博士課程ではオックスフォード大学数理・物理・生命科学部に留学し計算機科学科の量子情報基礎論グループで学んだ。博士課程在学中に京都大学白眉センターに着任した為しばらくは京都とオックスフォードを往復する二重生活を送っていた。この度受け入れ教員退職に伴い配属先を変え10年ぶりに総人(人環)に戻って来た。

オックスフォード大学留学中、総人が危機に瀕しているということを知人より知らされ、『人環フォーラム』の「世界の大学」というコーナーに「オックスフォードと意味の階梯:『総合人間学』という理念に寄せて」という一文を寄稿させて頂いたことがある(『人環フォーラム』No.33, pp.46-47, 2013年)。その中で、専門を異にする者たちが集い議論する総人はオックスフォードのコレッジのような所であると書いたのを、今でも覚えていて下さる総人の先生がいるのはとても嬉しいことだ。

なぜ総人に入ったのか今ではもうはっきりと覚えているわけではない。中高生の頃から数学や物理と哲学の両方に関心があった。ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』と高木貞治の『数の概念』を同時に読んでいたのを覚えている。数学と哲学と言えは何か全く別物のように聞こえるが、多少はものを知るようになった現在の視点から見ると、この二冊はその内容において全くの別物という訳ではない。とは言え、当時はただ何となく読んでいた。

その頃私はもう高校には行っていなかった。なぜ人は当たり前のように学校に行くのか、朝起きてその日何をするかは全て自分の考えで決めるべき

きではないのか、という中二病のような疑問を拗らせた結果である。ある日、自主退学を申し出た所、口煩かった生徒指導の教師は手のひらを返し、何をやっても良いから学校に残れと言うようになった。仲の良かった教師は特に反対せず、退学後しばらくして、段ボールいっぱいの本と一通の手紙が届いた。

あの手紙に何が書いてあったのかその記憶も今はもう曖昧である。でも一つだけ覚えていることがある。学校が私に自主退学を思い留まらせる為に設けた面談の場で私は、学校を辞めて宗教に入ると詰まらぬ冗談を言った。その教師は冗談を真面目に受け取り、手紙の中には、天台宗か曹洞宗を勧めるといような助言が含まれていた。本当にこの二つの組み合わせだったか定かではない。自身は若いころ禅寺に入り絶望して帰って来たとのことだった。

その教師は私に哲学者になることを勧め、もう一人仲の良かった別の教師は私に科学者になることを勧めていた。結局どちらの勧めにも背いたのか、どちらの勧めにも従ったのか判然としない。自身の出版物の一覧を眺めると、七割ほどは数学的な内容の論文であり、三割ほどは哲学的な内容のものである。通常地に足のついた研究者からは訝しまれることもままある。そのバランスが今後どうなるのか自分でも確かな予測ができるわけではない。

実は学部生のころ妙な単位の取り方をした所為で、卒論も終わり院試にも合格済みであった四回生の二月か三月に突然卒業できないと分かった際にも、こんな大学はもう辞めてやると言ったことがある。その時ご親切に論じて頂いたのが指導教員の櫻川貴司先生でこの場を借りて感謝申し上げたい。また二回生の頃からアドバイザーとなって頂いて先述の人環フォーラムに寄稿する機会を与えて下さった立木秀樹先生にもここで併せて感謝申し上げます。

(まるやま よしひろ)

ご退任を迎えられた先生から

人・環での四半世紀

田中 雅一

(国際ファッション専門職大学副学長／
京都大学名誉教授)



本大学院の第二専攻が設置されたのは1993年4月。私はその当初から文化人類学分野の協力教員として大学院教育に携わってきました。創設から関わってきた教員の、

残り少ない一人だと思います。東北大学文学研究科の博士課程在学中にロンドン大学経済政治学院(London School of Economics and Political Science: LSE)に留学。国立民族学博物館で助手として1年10ヶ月働いた後、1988年6月に京都大学人文科学研究所に異動しました。

人間・環境学研究科設置の目玉の一つとなる文化人類学講座に、人文科学研究所から谷泰教授とわたしが協力講座のメンバーとして参加してほしいという要請があった時、人文研ではかなり議論があったと聞いています。「研究所」としてのアイデンティティの根幹を揺るがすと受けとめられたからだったようです。当時、私は人文研に就任して3年ほど、まだ30代半ばでした。人文研の今後を考える意識もなく、谷教授の苦悩を十分に理解していたとは言えませんでした。あまり深刻に考えずに大学院教育に関わることになったのです。

博物館や研究所には学生がいません(現在民博には総合研究大学院大学の博士課程が設置されています)。学生不在の世界から、大学院だけとはいえ教育に関わることになって一番実感したのは、季節感が戻ってきたということでした。学生のいない世界には学校行事と呼べるものがほとんどあ

りません。入学式や試験・採点、公聴会、年二回の大学院入試、そしてなによりも夏休み!大学院で教え始めて、再び学校行事に出会ったわけです。それまでは、大学近辺にやってきて初めて、ああ、今日は入学式なんだなどと気づきます。フラットな研究生生活にリズムが生まれたのですから、これは大きな変化でした。

変化は季節感だけではありません。毎年大学院に進学してくる院生たちとの出会いは、私の人生に大きな影響をもたらしました。直接指導した修士課程の学生は60人以上、博士論文を指導した学生も15人になります。もちろん学生全員が論文を提出するわけではなく、途中で一般企業に就職して大学以外の道に踏み出していった者も少なくありません。しかし、そのような学生たちも私には刺激的な存在でした。例えばある学生は、FROG(Feminist Radical Onanie Group 1996?)という集団を紹介してくれました。

FROGのニューズレター『けもの道 あくまで実践、獣フェミニスト集団FROG』創刊号の記事「FROG設立までの道のり」に次のような説明があります。

・・・そう言えば、男から男オナニーの話聞いたことはあるというのに、女から女オナニーの話は聞いたことがない。他の女はどうしているのか。3人で話すだけでも、「えっそうなん。」と驚かされること数多。もっとたくさんの女と話してみたら、もっとおもしろいんじゃないか。(中略)そしてまた、フェミニズムにおいて

オナニーが語られることってあんまりないんじゃないの。フェミニズムってきれいすぎるんちゃう、汚れてないねえ。まっとうなフェミニストからも、フェミニスト嫌いからも嫌われてみてもよいかと「獣フェミニスト集団」という名が生まれ・・・。

FROGは、女性への差別を糾弾し、その地位向上を目指す主流派のフェミニズムに満足していませんでした。主流派フェミニズムにとって売春や露骨な性の表象は、女性の商品化にすぎませんでした。また、女性が積極的に自身の性欲を肯定することは、「いやいやよも好きのうち」といった男性中心の論理に簡単に絡みとられてしまうという危険もありました。そういう状況でFROGは、オナニー会を催して男女がオナニーを論じる場を提供したり、女性のオナニーの多様性を明らかにして、性的主体性について考察していたのでした。私が売春の合法化を求めるサンフランシスコ生まれの集団COYOTE (Call Off Your Old Tired Ethics, 1973年設立)の存在について知ったのも、彼女たちを通じてだったと記憶しています。

そのころ、ロンドンで愛読していた*Spare Rib*という情報雑誌の広告から、私は女性のオナニーやオーガズムに関心を持ち、論文(「世界を構築するエロス——性器計測・女性の自慰・オーガズムをめぐって」青木保他編、『岩波講座 文化人類学 第4巻 個からする社会展望』1997年、後に『癒しとイヤラシ——エロスの文化人類学』筑摩書房、2010年に所収)を準備していました。

しかし、売春に注目することになったのは、つい最近のことです。COYOTEのように、売春に携わっている女性たちに労働者の権利を認めようとする運動は、今では世界各地に広がっていて日本も例外ではありません。しかし、それに賛同するフェミニストたちはまだまだ少数です。主流派は、売春を家父長制の最たる暴力とみなし、これを廃止し、女性たちを救済しようとしているから

です。実際、合法化を求める運動のスローガンは「私たちを救済しようとする人々から救ってください! (Save us from Savors!)」です。私はこういう状況で、売春女性(セックス・ワーカー)に会って、その実態を「やっとホントの顔を見せてくれたね!——日本人セックスワーカーに見る肉体・感情・官能をめぐる労働について」(『コンタクト・ゾーン』6号、2014年)にまとめました。女性のオナニーやオーガズム、売春以外にも、AV、秘宝館、下着、精力剤、緊縛など、文化人類学の枠を超え、通常学術の対象として避けられてきた事柄を精力的に取り上げました。私が自分の問題意識の正しさに自信を持てるようになったのは、遠い昔に「獣系フェミニスト」たちと出会っていたからではないか。今ふり返ってそんな風に思います。最近の試みに「セクシャリティ・ジェンダー体制とその宗教的攪乱——デーヴァダーシーと子宮委員長はるをめぐって」『宗教研究』395号、2019年があります。

最後に一言。長年私が、文化人類学者として研究と教育に関わり続けることができたのは、ロンドン大で受けた教育のおかげだと思います。当時の教員の方々にはたいへん親切に指導していただいたという思いが強くあります。そして、教育の場で不可避に生じる師への負債は返済すべきではなく、新しい世代に利子付きで先送り(いわゆる恩送りですが、『負債論』の著者、デヴィッド・グレーバーに敬意を払って負債という言葉を使います)すべきだというのが、いつからか私の思いになっています。恩返しの期待(真の教師はそんな期待を抱かないでしょうが)を裏切り続けることこそ、教育の真髄ではないでしょうか。もちろん、いい教育を受けた教師たちが、つねに負債の先送りに成功しているわけではありません。その意味で、私は大変幸福な25年を人間・環境学研究科で過ごすことができたと思います。長い間本当にありがとうございました。

(たなか まさかず)

総人環

編集後記

◆『総人・人環広報』第63号をお届けいたします。誌名が『総人・人環広報』に変更になってから3号目、表紙と裏表紙のデザインが一新されてから2号目の発行となります。総合人間学部と人間・環境学研究科が一体であることを周知するための変更ですが、その趣旨が一号ごとにさざ波のように伝わって

いくことを願っています。今号には、新しくお迎えした先生方のうち5名の方からのメッセージと、3月末にご退職された先生方のうち1名の方からのご挨拶を掲載しました。いずれも読み応えのある文章ばかりですので、ぜひご一読ください。くわえて、平成30年度総合人間学部卒業論文・卒業研究題目一覧を掲載しました。卒論・卒研のテーマをどうしようと悩んでいる学部生の皆さんの参考になれば、うれしく思います。

(O・I)



南紀合宿での記念写真

総合人間学部
人間・環境学研究科

広報委員会